はしがき

一、本書は高等学校国語科の補充教材として使用するために編集したものである。

一、更級日記がどういう書物であるかということについては、「解題」の項で述べるが、ここには次のことを一言しておきたい。それは本書の読み方に関係の深いことだからである。いったい、高等学校の国語科の授業において、たいそう残念に思うことの一つは、学習の材料の一つ一つの分量に制限があって、ほんの短い一分節のみを取り扱うので、長く続いた筋を持つ文学を味わうという興味をそそったり、またそういう力を養ったりする点に欠けていることである。これはその性質上、やむを得ないことであるが、いくらすぐれた作品でも、その中のほんの数ページを抄出しただけのものでは、その興味の大半を伝え得ないことは、ぜひもない。だから一方、補充教材などで何か一つでも全巻を読みとおすという体験をぜひ持ってもらいたいと思うのである。

そのためにはどんな古典が適当かというと、これにもいくつかの案はあるが、徒然草や枕草子のような随筆類は、一段一段がまとまっているから、ぜひ全編を読まなければならないという必要性はややうすい。源氏物語などでは分量が多すぎる。そこで、比較的短い分量で、むずかしさもさほどでなく、しかも文芸的価値は相当に高いという点で、この更級日記などがきわめて適当なものと考えられるのである。

一、本書は以上のような見地から、更級日記の全文を採録し、それに研究課題を付して、大体、六、七〇時間の授業に適当なように編集したものである。

一、研究のための課題には、つとめて多くの種類のものを取り入れ、学習者の多方面の学力を養成するのに遺憾のないようにした。――なお、更級日記が高等学校で読まれるのは、大体、中級または上級においてであり、それはすでに初級において、ひととおり古文学習の入門を終了し、さらに高次の段階に進もうとしている人々であるから、本書の課題も、それに歩調を合わせてある。

一、頭注は、辞典をひけばすぐにわかるようなものはあまり載せずに自発的学習に待ち、そうでない事項を説明することを第一とした。辞典をひくことをめんどうがらない習慣をぜひ作ってもらいたいと思うからである。

一、図版はなるべく古典に多くあらわれ、他の古典を読む場合にも広く応用のきくようなものを選んで載せた。

目次

○解題

一、あづまぢの道のはてよりも……一
二、年ごろ遊びなれつるところを……二
三、十七日のつとめてたつ……四
四、そのつとめてそこをたちて……五
五、今は武蔵の国になりぬ……六
六、野山・芦荻の中を……九
七、足柄山といふは……一〇
八、からうじて越え出でて関山に……一三
九、富士川といふは……一四
一〇、ぬまじりといふ所もすが〳〵と過ぎて……一六
一一、栗津にとゞまりて、しはすの二日京に入る……一九
一二、ひろ〳〵と荒れたる所の……二〇
一三、継母なりし人は……二二

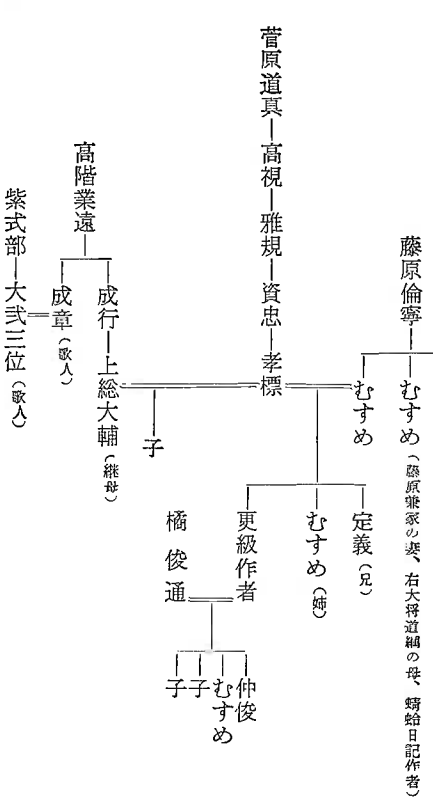
一四、その春、世の中いみじうさわがしうて……二四
一五、かくのみ思ひくんじたるを……二五
一六、五月ついたちごろ、つま近き花橘の……二八
一七、物語のことを、昼は日ぐらし……二九
一八、花の咲き散るをりごとに……三〇
一九、世の中に長恨歌といふ文を……三三
二〇、その十三日の夜、月いみじくくまなく……三三
二一、そのかへる年、四月の夜なかばかりに……三五
二二、その五月のついたちに、姉なる人、子産みて……三六
二三、乳母なりし人「今は何につけてか。」など……三七
二四、この乳母、墓所見て……三八
二五、雪の日をへて降るころ、吉野山に住む尼君を……三九
二六、四月つごもりがた、さるべきゆゑありて東山なる所へ……四〇
二七、念仏する僧の暁にぬかづく音の……四二
二八、暁になりやしぬらむと思ふほどに……四三
二九、京にかへり出づるに……四四
三〇、旅なる所に来て、月のころ……四五

継母なりし人、下りし国の名を……四五
三一、かやうに、そこはかなきことを……四六
三二、親、となりなば、いみじうやむごとなく……四七
三三、七月十三日に下る……四九
三四、八月ばかりに太秦にこもるに……五〇
冬になりて、日ぐらし雨ふりくらいたる夜……五一
三五、あづまより人きたり……五三
三六、かうてつれ〴〵とながむるに、などか物まうでも……五三
三七、母一尺の鏡をいさせて……五四
三八、ものはかなき心にも、常に「天照御神を……五六
三九、あづまに下りし親、からうじて上りて……五七
四〇、十日になりて京にうつろふ。母、尼になりて……五八
四一、まづ一夜まゐる……五九
しはすになりて、またまゐる……六〇
四二、十日ばかりありてまかでたれば……六一
四三、ひじりなどすら前の世のこと夢に見るは……六三
四四、十二月二十五日、宮の御仏名に……六五
四五、かうたち出でぬとならば……六五
四六、その後は何となくまぎらはしきに……六六
四七、またの夜も月のいとあかきに……六八
四八、冬になりて、月もなく……六九
四九、上達部・殿上人などに対面する人は……七一
「いま一人は。」など問ひて……七一
五〇、また、さかと思へば、冬の夜の空さへ……七三
五一、冬の夜の月は、昔よりすさまじきものの……七四
五二、またの年の八月に内へ入らせたまふに……七七
五三、今は昔のよしなし心もくやしかりけりと……七九
五四、そのかへる年の十二月二十五日、大嘗会の御禊と……八一
五五、「道、顕証ならぬさきに。」と……八三
五六、夜深く出でしかば、人々困じて……八五
五七、つとめてそこをたちて……八六
暁、夜深く出でてえとまらねば……八七
五八、二三年、四五年へだてたることを……八八
五九、二年ばかりありて、また石山に……八九

また初瀬にまうづれば……八九
六〇、何事も心にかなはぬこともなきまゝに……九〇
やよひのついたちごろに、西山の奥なる……九一
六一、世の中むつかしうおぼゆるころ、太秦に……九二
うら〳〵とのどかなる宮にて……九二
同じ心にかやうにいひかはし……九二
六二、さるべきやうありて、秋ごろ和泉に下るに……九三
冬になりて上るに、大津といふ浦に……九四
六三、世の中にとにかくに心のみつくすに……九五
六四、二十七日に下るに、男なるは添ひて……九七
九月二十五日よりわづらひ出でて……九八
六五、昔よりよしなき物語・歌のことをのみ……九九
六六、さすがに命はうきにも絶えず……一〇一
六七、をひどもなど一所にて朝夕みるに……一〇三
六八、年月は過ぎかはりゆけど……一〇四
○更級日記略年表……一〇五

更級日記解題

一、作者　菅原孝標のむすめである。この時代の常として、女子の本名は明瞭でないことが多く、この人もその一人であり、女房名もなかったので、父の名をとって前掲のように呼ばれる。その家がらを表示すると、



詳注

更級日記

【一】
○あづまぢの……東海道の終点よりもっと奥の方にある国。上総の国（今の千葉県の中部）をさす。古今和歌六帖「あづま路の道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな」による。
○よひゐ―夜、家族が団欒していること。
○姉・継母―解題参照。
○等身―自分の身長と同じぐらいに仏像をつくる。
○薬師仏―大医王仏ともいう。その十二誓願の中に、人間のこの世における希望を満たしてやろうという誓願があるので、何かこの世に望みのある者が、この仏に祈る。

薬師如来
（京都神護寺）

【一】 あづまぢの道のはてよりも、なほ奥つかたにおひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、つれ〴〵なるひるま、よひゐなどに、姉・継母などやうの人々の、その物語、かの物語、ひかる源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとゞゆかしさまされど、わが思ふまゝにそらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきまゝに、等身に薬師仏をつくりて、手あらひなどして、人まにみそかに入りつゝ、「京にとくあげたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ。」と身をすててぬかをつき祈り申すほどに、十三になる年のぼらむとて、九月三日かどでして、いまたちといふ所にうつる。

【研究】

（一） この書き出しの一節を見ると、まず、作者が読者に自己を紹介

○人まに―人の見ていないすきに。
○九月三日―寛仁四年（一〇二〇）
○かどで―当時の風習として、旅に出るには、まず縁起の吉い日を選んでかりに自分の家を出、すぐ付近の家に数日逗留して、それから実際に都合のよい日に本式に出発した。その逗留の期間をも「かどで」といった。
○いまたち―今のどこに当たるか不明。あるいは「新館」か。
○研究(二)(B)(ロ)いかでか―この「か」はなくても同じ意。

【二】
○車―こゝは牛車でなく手車。

【三】
○めぐり―家の周囲にめぐらしてあるもの。垣根や塀などの類をいう。
○かや屋―茅ぶき屋根のそまつな家。
○しとみ―「蔀」と書く。風雨を防ぎ、日よけをするための戸。今の雨戸にあたる。細い木を縦横に組んで格子にした戸の片面に板を張ったもの。寝殿造りで、柱と柱との間に上下二枚を入れ、一枚は上につり上げるように作り、一枚は下に立てて取りはずしのできるようにしてある。

○境―国境。こゝは上総の国と下総の国との国境。
○しもつさ―「下つ総」の「ふ」が省かれたもの。「上つ総」に対する。「上総」はほぼ今の千葉県の中部。下

(1) 物語といふもののあなるを
(2) 物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ。

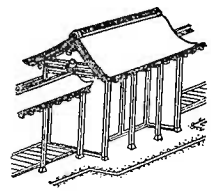
【三】 年ごろ遊びなれつるところをあらはにこぼちちらして、たちさわぎて、日の入りぎはの、いとすごくきりわたりたるに、車に乗るとてうち見やりたれば、人まには参りつゝぬかをつきし薬師仏の立ちたまへるを、見すて奉る悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。

かどでしたる所は、めぐりなどもなくて、かりそめのかや屋の、しとみなどもなし。簾かけ、幕など引きたり。南ははるかに野の方見やらる。東西は海近くていとおもしろし。夕霧たちわたりていみじうをかしければ、あきいなどもせず、かたぐ見つゝ、こゝをたちなむこともあはれに悲しきに、同じ月の十五日、雨かきくらし降るに、境を出でて、しもつさの国のいかたといふ所にとまりぬ。庵なども浮きぬばかりに雨降りなどすれば、おそろしくていもねられず。野中に岡だちたる所にたゞ木ぞ三つ立てる。その日は、雨にぬれたる物どもほし、国にたちおくれたる人々待つとて、そこに日をくらしつ。

【研究】
(一) 次の文中、傍線を施した「る」「らる」について、その文法上の意義と、この場合に用いられている活用形の名称とをそれぐ書け。
(1) 人知れずうち泣かれぬ。　(2) はるかに野の方見やらる。
(3) おそろしくていもねられず。
(二) 「いとすごくきりわたりたるに」を解釈せよ。
(三) 右の「きり」は名詞か動詞か、もし動詞だとすれば、その活用をいえ。
(四) 「見すて奉る悲しくて」というような言い方は、この時代の文章にはよく見える言い方であるが、現代語で表現するには、どこに、どういう語を補ってみればよいか。

総は今の千葉県の北部、および茨城県の一部。
○いかた―現今の千葉市、寒川辺一帯の古称かといわれる。

【三】
○まののちゃう―「まの」は地名、真野と書く。今の千葉市の近くであったという。「ちゃう」は長者の意。これは伝説学上「長者伝説」とよばれる類のものの要素をそなえている。すなわち、昔すばらしい大金持ちがいて、豪勢な家や広大な土地を持っていたが、何かの道に、そむいたことをしたために、一夜のうちにその家や土地が川または湖などになってしまった――と伝える話で、他の地方にもある。
○ひきぬの―一疋続きにしてある布。疋は二反。
○千むら万むら―「むら」は布などの巻いたものを数えるのに用いる単位。


四足門

【三】　十七日のつとめてたつ。昔しもつさの国にまののちやうといふ人住みけり。ひきぬのを千むら万むら織らせ、さらさせけるが家の跡とて、深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きなる柱、川の中に四つ立てり。人々歌よむを聞きて、心の中に、

朽ちもせぬこの川柱残らずは昔の跡をいかで知らまし

その夜はくろとのはまといふ所にとまる。かたつ方はひろ山なる所の、砂子はる〳〵と白きに松原茂りて、月いみじうあかきに風の音もいみじう心ぼそし。人々をかしがりて歌よみなどするに、

まどろまじこよひならではいつか見むくろとのはまの秋の夜の月

【研究】
（一）「さらさせけるが家の跡」の「が」を文法上から説明せよ。
（二）「この川柱残らずは」の「は」を文法上から説明せよ。
（三）「風の音もいみじう心ぼそし」というのと、「人々をかしがる」というのとは、矛盾してはいないか。傍線をつけた二語の意味を説明して答えよ。
（四）「こよひならではいつか見む」の「む」は、単なる推量の意では足りない。どういう意味であろうか。

○四つ立てり―「四つ」は四足門の柱。四足門は大臣以上の家でなければつくることを許されなかった。
○くろとのはま―未詳。

【四】
○ふとゐ川―太井川または太日川と書いた。今の江戸川の下流の古い名。この川を下総と武蔵との国境にあると書いているのは作者の記憶ちがい。
○まつさと―今の松戸かといわれているが、どうか。
○手ばなちに―手をかけていない様子で。
○とま―「苫」と書き菅・茅などを菰のように編んだもの。家の周囲や屋根などを覆うに用いる。
○車ひき立てて―車の轅を榻にかけておくことを「立つ」という。

【四】　そのつとめてそこをたちて、しもつさの国と武蔵との境にてあるふとゐ川といふがかみの瀬、まつさとのわたりの津にとまりて、夜ひとよ、舟にてかつがつ物など渡す。乳母なる人は男などもなくなして、境にて子産みたりしかば、はなれて別にのぼる。いと恋しければいかまほしく思ふに、せうとなる人抱きてゐていきたり。みな人は、かりそめのかりやなどいへど、風すくまじくひきわたしなどしたるに　これは男なども添はねば、いと手ばなちにあら〳〵しげにて、とまといふものを一重うちふきたれば、月残りなくさし入りたるに、紅のきぬ上に着てうちなやみてふしたる月かげ、さやうの人にはこよなくすぎて、いと白く清げにて、めづらしと思ひてかきなでつゝうち泣くを、いとあはれに見すてがたく思へど、いそぎゐていかるゝこゝち、いとあかずわりなし。おもかげにおぼえて悲しければ、月の興もおぼえずくんじふしぬ。

つとめて、船に車かきすゑて渡して、あなたの岸に車ひき立てて、おくりに来つる人々、これよりみなかへりぬ。のぼるはとまりなどして行き別るゝほど、行くもとまるもみな泣きなどす。をさなごこちにもあはれに見ゆ。

【研究】
（一）「これは男なども添はねば」の「これ」とは何をさすか。